

第一回課題集約 特攻のイメージについて

今まで私が知っていた特攻に関するイメージは、片道分の燃料しかない飛行機に爆弾を積んで敵に突っ込んでいくといったものでした。そして、特攻隊員として死んでいった人たちが敵に突っ込んでいくときの気持ちは、とても無念なものだったろうと考えていました。でも、講義で先生がおっしゃっていたように、彼らの気持ちを推し量るのは無理なことで、その他の人間がいくらあれこれ考えてもそれはあくまで他人事でしかありません。「決死」ではなく「必死」、必ず死ぬというときの気持ちを推し量ろうとすること自体間違っていたのだと思いました。

ところで、「必死」ということばですが、戦争にいった方が「決死と必死を一緒にしないでほしい。決死と必死とは全く意味が違う」とおっしゃっているという話を講義で聞いて、「必死」ということばについて考え直してみました。辞書を引いてみると、戦時において使われた意味である「必ず死ぬこと」と、現在我々が使う「死に物狂い」という二つの意味があります。私たちは、今、「必死になって勉強した」とか「必死になってがんばった」というように必死ということばを使います。ですが、戦時におけるそのことばの重い意味を考えると、「必死に～した」だなどとは軽々しく使うことができないと思わずにはいられません。

「特攻」と聞いて、戦争、死、過去の過ちなどといったキーワードを思いうかべる人は、今日の日本においては、少なくないと思う。私もその一人であり、特攻といえば、戦前の日本の教育の影響を受けて(悪い言い方をすれば、洗脳されて)国民の間で美化され、多くの人が、特攻隊に憧れていた、というイメージしか持っていなかった。

講義を聴いた今でも、あまり「特攻」に対するイメージに変化はないといった方が良いかもしれない。講義の中では、神風の合理主義といった軍事的な背景なども挙がっていたが、それでもなお私にとっては、戦時中の軍の作戦全体が特攻作戦だった、ということや、敷島隊の突入が、マスメディア効果もあって美談となった、ということは全て、戦前の教育の影響が一番大きいのではないかと感じたに過ぎなかった。というのも、戦争を「知らない」私にとって、特攻はとても残酷なものだと思うし、戦争を「知らない」からこそ、命を顧みずに攻める、という行為自体が信じられないからである。

しかしながら、戦争と言う、今日から見れば現実離れた状態の中で、国民が特攻に対して、ある種の憧れを持っていたことは、感情だけで論じる事は難しいと感じた。だが、再三出撃を繰り返した敷島隊の戦果に多くの国民が感動し、日本がここから特攻の世界にどんどん入っていくようになった、ということは、当たり前といえば語弊はあるが、国民や国の心理が、少し

分かる気がした。

私が抱いていた特攻に対するイメージは、日本がアメリカを倒す最後の手段として国ががむしゃらに勝手に決めた戦争攻撃手段であるという具合です。私は熊本出身で九州の大きな特攻基地となった知覧について聞いた話ですが、多すぎる若者が正義の気持ちを持って集まり、最後の水の杯を飲み、命を無くしていったということしか分かりません。

今日の講義から感じたことは、おとりから始まった作戦自体が特攻であり、それが成功し、メディアの力によりこうも簡単にその当時の日本人の心は変われるのかということでした。また、そこによりでっかいものを撃破という神風の合理主義が加わり、日本国民自体が自らマインドコントロールしてしまったのではないかと思います。

ここでは、マインドコントロール出来なかった、神風特攻隊の若者何人いたか分かりませんが、命の燃焼が出来なかったことを想像するだけで、残酷に思います。日本の特攻はいけなかったと思いますが、戦争で亡くなっていかれた何も知らない方々に対してはなんと言っていいいか分からないのが実際のところです。

特攻とは、当時の日本軍にとっては最後の手段であつたに違いない。もはや、戦況が目に見えて不利に陥っていく状況下で海軍幹部、そして大西瀧治郎が作戦発動を決断したことは共感するか否かは別として、納得できないことではない。

しかし、実行する者達の気持ち、出撃していった隊員の本心は講義で述べられていたように、想像と予測の範囲を超えることが出来ないのではないかと。さらに、今回の講義で最も驚きを感じた新たな点は、4度目の出撃であったという事である。以前に3度死を覚悟し飛び立っていた者達が、米軍を発見できずに帰還した後に、再び飛び立って行ったという事実。しかも、それが報道の対象となり、美談として語られた社会状況。正に戦時下の、ある種麻痺していた人々の心情を投影していると思った。「一機命中・二機命中」という、突撃の成功報告を聞く者達の言葉では表せない興奮、怒り、憤り、感慨。我々は知り、近づく事は可能であるが、これもまた同じ感情を抱くことは出来ないものではないかとも思う。

その当事者の心、思いを見る事が、時代背景であり事件そのものを適切に分析する方法であると思う。しかし、特攻隊のように大きな溝があり、永遠に不可触な空間を持つ事例にはどの

ように取り組むべきなのか、という問題を、講義後自分自身に提起するに至った。

特攻については祖父から話を聞いたことがあり、多少の知識は持っていた。祖父の友人はもう少し終戦が遅れたら特攻隊に送られるところだったらしい。その祖父の友人は戦争に対しては批判的な考えを持っていた人物で、祖父に対し「特攻隊に配属されるのを待っている日々は死ぬのを待っているのと同じ。生きた心地がしなかった」と話していたそうだ。

ベテランパイロットの減少により、未熟なパイロットを特攻の駒として使わざるをえなかった、ということは講義において初めて知った。特攻のパイロットが平均して若かったということは知っていたのだが、そういった背景があったとは知らなかった。特攻とはある程度の腕を持つパイロットが行ったと思っていたので、これには驚かされた。天皇陛下と叫ぶよりも母親について叫んで散っていったことも納得のいく話である。

当時の軍の上層部は、特攻を繰り返せば日本は勝てると本気で信じていたのであろうか。負け戦を覚悟していたのなら、若者には戦後の復興の要として動いてもらうほうがよほど良い結果になっていただろう。特攻などというものは資源と人命の無駄使いに過ぎなかったと私は考えている。

これまで、自分なりに日本の歴史における戦争について調べたり考えてみてきたのですが、太平洋戦争だけは腑に落ちない箇所が多々ありました。その一つに「特攻」があったわけですが、その隊員たちの遺書などの史料を目にすると「正気を失った日本人」というようなことは全くなく、「死を目前にしてとても恐ろしいけれど故郷の家族を守るため、自分の出来る事は特攻隊の任務を全うすることです」と言うような人間として正しい感覚を持っていたながらも、親しい人のために行動を起こす勇気を持っていた人たちがたくさんいた、と感じます。ただ単に「当時の日本人は狂っていた」と言う人がいますが、特攻隊員たちの感性は特に狂っていたとは考えにくいと思います。彼らは正常であるはずですが、しかし、やはりその行為は野蛮であり、恐ろしいものです。正常であるはずの彼らを死に駆り立てたものは何か？これが僕自身ハッキリとした答えが見つからない問題なのですが、講義を聞いて分かった点がいくつかありました。海軍上層部では兵士に対し、なかなかこの「人間兵器」の命令を下せなかったこと。戦略性において損害を最小限におさえて敵に大打撃を与えるための「人間兵器」という存在。初の特攻戦術発動の報告書に「1発命中・・・」ではなく、「1「機」命中・・・」という表現になり、それ以後はある一線を超えてしまった、ということ。このような話を聞いて思ったことは、「人間の命と弾薬のどちらを重要視するか、が西洋と日本の相違点だ」と言う意見は単

純すぎるのではないか、ということです。結局、僕が一番感じた事は「単純に日米比較、東西比較をするだけでは真実は見えてこない」ということです。もっと多角的に当時の日本の戦争へのビジョンについて考察していきたいです。

私が今まで「特攻」に対して抱いていたイメージは授業の中でも再度触れていたように精神的な異常というイメージです。本の名前等は既に忘れてしまったのですが以前人間魚雷を成功させるために大変厳しい特訓が行われその時点ですでにたくさんの人が事故で亡くなっていた、ということを読んだことがあります。今回の講義ではそのような過程に至るまでには軍事的にやむ終えない事情があったことを知ることができました。

例えばガダルカナル島ではたくさんの良質なパイロットを失ってしまい、それを補うために体当たり攻撃が進言されたということなどは今回の講義で私自身初めて知ったことでありとても興味深いことでした。

メディアではやはり特攻の悲劇的な部分だけが強調されがちです。もちろんそのような心に訴える部分も必要ですが、戦時中に人々のなかにやはり特攻はいいけないという動きがあったことも事実ですし、そのような決死から必死、また必死から決死というプロセスを知ること、今世界中で起きている戦争に対してもただむやみに非難するだけではなく、冷静にとらえることができるのだと思います。

特攻に関するイメージは講義前と後では変わらなかった。しかし講義を受けていて改めて感じた事がある。それは日本人は犠牲になることが好きな人種であるという事である。かならず死ぬことがわかっている特攻作戦は上から命令されたものではなく、愛国心に燃える搭乗員たちの気持ちから生まれたものであるという犠牲精神は日本人だから作られたのだ、と私は感じている。

そして犠牲精神は今でも私たち日本人の心の中に脈々と受けつがれている。例えば日本人のする野球を考えてもそうである。ノーアウトでランナーが一塁へ出たら犠牲バントで確実に送る。ランナーが二塁の場合にはライト方向へ打ち、ランナーを進めるバuntingをする。ランナーが三塁のときは犠牲フライやスクイズで自分が死んでもランナーを返そうとする。日本人の選手達は自分のためよりもチームのために戦っているのであり、チームが勝つためには自分は犠牲となってもよい、と考えるのである。

太平洋戦争での日本人による特攻の犠牲精神はアメリカ人に驚きを与え、敬服されてもいる。そして日本人は犠牲精神を持っていてからこそ戦後の日本を立ち直らせ、日本を世界で

二番目の経済大国にすることが出来たのではないだろうか。

私の特攻に対するイメージは、自分の守るべき国、家族の為に、自分の命を捨てて、敵に体当たりをしていく勇気ある行動というものでした。しかし、授業で、特攻の話を聞き、特攻が決死ではなく必死の攻撃方法だということを改めて感じました。私は、一つの作戦の方法ではなく、一青年の愛国心から生まれたという形で捉えていましたが、このような必死の攻撃は、愛国心のある青年の行動とだけは考えられないことを感じました。特攻という作戦を、美化するだけでなく、相手を殺す為の作戦だということを頭にいれておくべきだということがわかりました。そして、一つの武器のように、毎日使われていくパイロット達が多く戦死したことにこの特攻が、一つの作戦であるということを強く感じました。

そして、前で述べたように、現代の人々は、特攻を美化していますが、それには、実はマスメディアが特攻は美しいものとして取り上げられたことによってできたものだということがわかりました。この美化により、相手に体当たりをしていく大変な任務を行うパイロットとその家族、又日本国民自身がこれらの信じられない作戦をなんとか自分自身の中で納得する唯一の方法だったのだと思います。そうしなければ、普通の感情では、このような任務を行えないと私は思います。そして、この美化という行為から特攻が、一つの攻撃の作戦ということを私は忘れてしまって、いたのだと思います。

私は高校3年生のとき、ある予備校の日本史の授業で特攻によって亡くなった青年の家族にあてた手紙を読んだことがある。特攻という、現代を生きる私たちには理解しがたい最期を遂げた、自分と同年代の若者。私は今もその手紙の一文を忘れない。それは、母親や妹に一分一秒でも長生きして欲しいから自分は特攻にいくのだ、というものである。「お国のために」などという言葉よりもずっと身近に感じられる言葉であった。

今回の講義で最も印象に残ったのは、私たちは悲劇というものをやたらと美化してしまう、ということだ。そして私たちはその美化された悲劇が大好きである。それは無名の死を特攻という悲劇にはめ込もうとする行為や、当時の人々がマスメディアを通じて特攻を美談とした状況に表れている。

言うまでもなく戦時中に無名の死を遂げた人は大勢いる。しかし数字として注目されるほか、私たちはより壮絶な死に目を向けがちである。それを日常的な作戦として用いた大西瀧次郎も、当初感じていたむごさを忘れるほどに至っていた。特攻隊の中には上からの命令として従わざるを得なかった人も多かったであろう。

私たちは終戦から57年を経た現在、戦争を美談としばかりでなく、怒りをもって受け止め、また冷静に将来を見つめなければならないと考える。

特攻と聞くと大日本帝国軍の犠牲者だとすぐを感じる。また、彼らのおかげで今の日本があり、彼らの屍の上に今の日本があると言い彼らを英雄視する人もいる。私が彼らのことを述べ、良し悪しを問うのはおこがましいのかもしれないが少し述べたい。

授業の中で先生が述べられたことはまず9・11事件と神風特攻隊である。私はこれらの決定的な違いは宗教であると考えます。特攻隊では先生が言われていたように成功者の意見は聞けない。そして生き延びた特攻隊員の意見もまた推測でしかない。しかし9・11事件ではその大きな根拠は宗教であり自分の意志・思想に基づいた自爆であったのに対し、特攻隊は自分の意志に関わってなく、全て上からの命令によって動いていたといえてよい。この違いは大きい。

また決死と必死の違いがある。先生が言われていた通り決死は死ぬ覚悟があっても必ずしも死ぬわけではなく、それに比べ必死は必ず死に、生還率は0%である。そして先生は必死というのは第二次世界大戦時の日本にしかないと言われた。初め私はこれには多少の疑問を感じた。私は必死というのは必ずしも第二次世界大戦時の日本にだけ存在するとは思わなかったからだ。世界中の人々が起こす自爆テロ、第二次世界大戦時に明らかな敗北を前に死の戦場ヘイトラーの命令により送り込まれたナチスの部隊、毛沢東による長征...世界で起こった事象をいろいろと考えてみた。必死は存在したのではないかと。しかしやはり考え抜いた結果、必死というのは特攻隊以外存在しないのではないかと思うのである。必死というと一般的に使われる言葉であり、案外存在しがちと思うがこれはかなり特殊な言葉であると感じる。その特殊な中に身を投じた日本人のことを考えることは大きな価値があり、深くそして難しいともまた考える。

講義で知った「特攻」に至るまでの過程は私の持っていたイメージとは大きく異なるものでした。私の今まで持っていた特攻のイメージはある日突然普通の攻撃方法から「特攻」というそれまでの歴史では考えられなかった作戦に冷静な判断ができなくなっていた指揮官が強引に転換した、というものでしたが先生の講義でその転換が隊員の命の犠牲をもうとわれないという判断をのぞいては、少ない物資と人材で最大限の被害を敵に与えるというきわめて合理的な判断をしていたということを知りました。

また「特攻」に関する報道をしていたことも知りませんでした。一般の国民がそれを絶望ではなく感動を持って受け止めていたことにもおどろきました。

これまで私は特攻というと、ゼロ戦で相手戦闘機に体当たりするというくらいしか、知りませんでした。ですから、特にそのことについて考えることもなく、馬鹿なことをしたものだと思っているだけでした。また、自分自身が当事者でない以上、何を言ってもそれは単なる空想、あるいは机上の空論に過ぎないとも考えていました。しかし、そうした考えが誤りであることを知りました。痛みを知ることは出来なくても、想像することは出来るのです。以前の私はただ、事実を知ること、思考することを怠り、見たくないものに目をつぶっていただけでした。今回の授業を受講してみて、特攻とは一種の演劇ではなかったかと、感じました。十分なシナリオ(勝利する可能性)もないまま、幕が開いてしまった。そして、なんとしても芝居を成功(勝利)させなければならないという強迫観念と恥ずかしいものは見せられないという強烈なプロ意識とが、異常とも言えるクライマックス(特攻という悲劇)を強行してしまった。途方もない「芝居」を止めなかった結果が、多数の戦死者と荒廃した国土につながったのではないかと。私はこのように思います。観客として鑑賞するだけなら、これ以上迫力のある演劇はありません。しかし、戦争は演劇ではなく、現実の世界で起きたことです。多大な痛みを伴い、実際に尊い人命が失われたのです。戦争が現実であることを忘れ、良い部分だけを抽出するという「芝居」を演じてしまったからこそ、鑑賞する者(国民)は芝居の筋を知ることがなく、敗戦を迎えてしまったのではないかと思います。これが当事者でない私が授業を受け、想像した結果です。

10月3日の授業で、まず「特攻」とは「決死」ではなく「必死」である、「九死一生」ではなく「十死零生」である、という事を改めて理解する事が出来た。つまり本質的に兵器としては、通常兵器とは一線を画しているということが、である。また逆に、サイパン島玉砕など戦局が悪化していく中で、熟練パイロットを失い、通常の爆撃では相手に損害を与えられなくなっていたわけであるが、海軍も色々な爆撃方法を考えていた。例えば、急降下爆撃やアメリカが実用化していた skip bombing(反跳爆撃)の模倣などである。但しこれは「必死」ではないにしろ、「特攻」に近づいていく性格のものであった。つまりこの計画というのは通常兵器の延長線上にあったわけである。これは私にとって、非常に新鮮な考え方であった。私の今までの「特攻」のイメージは通常兵器と「特攻」というものが、あまりにも乖離しすぎていた。ただしこれはあくまでも計画の話であって、じっさいに実施するとなると話は別だと思う。まとめるとするならば、「特攻」というものは、計画段階ではあくまでも通常兵器の延長線上にあり、それを実施する段階においては先に述べたように「必死」という線が通常兵器と「特攻」との

間に引かれているということが出来ると思う。

僕は今まで「特攻」というものは、一部の暴走した現場の軍人による愚行だと思っていた。しかし、当時の日本海軍はミッドウェイ海戦やガダルカナルをめぐる戦いによって優秀なパイロットを大勢失い、新人パイロットの比率が大きくなったため、効果的な攻撃ができなくなった海軍の、計画的な行動ということがわかった。しかし、僕にとってこのことは、特攻に対して感じるおぞましさを増しただけでした。なぜ、そのようなまともに戦えない状態でも戦争を続けなければならなかったのでしょうか。

戦死が決まっている「必死」攻撃と、ほんの少しでも生還の確率がある「決死」攻撃とでは、まったく当事者の受け止め方がちがうはずで。特攻隊員が残した遺書には、特攻について批判的な物は無いという話を聞いたことがありますが、これは検閲があったことを考える必要があります。たとえ、御国のためと言われて出撃が決まっても、本気で天皇や国のために死のうと思った人は少なかったと思います。実際、特攻への批判を口にした人が何人もいたことを知りました。この批判の本当の目標は特攻を組織化し、事実上強制した軍組織に向けられていたように思います。

戦争というものは、必ず悲惨な運命をたどるものですが「特攻」というものはその中でも特に悲惨なものだと思います。今後このようなことが無いようにするには、どうしたらよいのかを考える必要があると思います。

『特攻』という言葉に関して私が持っていた印象というか考えは、「どうして出撃してからこっそり逃げて戻ってこないのだろうか、当時の人々はそんなに愛国心が強かったのか」などという浅はかなものでした。しかし講義を受け、当時の爆撃システムや、戦闘機の積載の都合の事を知り、逃げて戻らなかったのではなく「逃げて戻れなかった、戻るのが不可能な心境と状況なのだった」事がわかりました。非常に多くの仲間たちが敵軍の空母などに体当たりして、何か戦績を残して死んでいっているのに、どうしておめおめと自分だけ帰還できるだろうか。そうした自分の中での責任感と共に、何もせずに帰還したら、敵前逃亡で処刑されるかもしれないという脅迫感もあり、もはやとるべき道は一つしかなかったのだと、改めて考えさせられました。また、講義中で先生がおっしゃっていた「大西瀧治郎を動かした言葉に出来ない何か」というのが、私にはすごく分かるような気がします。決して正しいことではなくとも、何か自信めいたというか、達成感的なもののような、そしてもうやるしかないというような感情が入り混じった何とも言えない昂揚感のようなものが大西を突き動かしていったのだと考え

ます。『特攻』という思想について非常に興味を持ちました。

今回の講義を受けて一番印象的だったのは、特攻隊として出撃していった人の気持ちは決してその人にしか分かり得ないと、先生がおっしゃった事です。私も「特攻隊」という語を始めて知ってから、その命令がどんなにむごたらしいものであったか、やはり下された人にかからないし、勝手に分かった気でそれについてむやみに美化したりしてはいけないと思っていました。この事は講義を受ける以前と後でも同じ気持ちです。しかし今回初めて知った事もこれから忘れられない、忘れてはいけない事だと考えています。特攻を統率できるのは彼だけと言われ、ついには越えてはいけない一線を越えてしまった大西瀧治朗中将も、初めてその攻撃を進言された時、拒否していた事。彼の思想にも葛藤があったと、そう捉える眼を最初から私は持っていませんでした。たった一人の思想から特攻隊という存在が生み出された訳でない事を知りました。またパイロット独自の判断で肉弾攻撃が以前からあった事。そういった死を覚悟して攻撃に望む姿勢が、目に見えない糸で部隊の中に張られていたと思われませんが、出撃するにあたってそれが「決死」であり、「必死」でなかった。それを特攻隊について知る時決して誤ってはいけない事であり、言葉では表せない思いがこの世にあるという事を思い知らされます。これこそ私が始めに述べた様に自分が分かった気であるのかもしれませんが、特攻隊として出撃していったその思いを自分の中で考えようとすると、無意識に目頭が熱くなります。それが人間の本能とよべるに値する気がします。人間の尊厳についてどれだけの理解を深めても越えられた何かを人間が持ち、それは当人にしか分かり得ないと今回講義を終えて私は考えました。

私は大学に入る前、特攻隊について自ら調査したことのある日本史の先生から話を聞いたことがある関係で、講義の前後でそれほどイメージの違いはありませんでした。

そこで今回9・11のテロとの比較という新しい見方から今の時点で自分ができる考察し、その後自分の特攻に対する意見を述べることにしました。

無差別テロと、戦中の軍隊の特攻ではもともと違うものであると相違点はいろいろと挙げられますが、共通点を挙げるなら実行者が自分の死を前提に必死の覚悟で目標に突入したことでしょう。一方、相違点の一つ挙げるなら日本の特攻隊はある政治的、宗教的な目標をたっせいさせるための積極的な行動というよりは、明らかに不利な戦局の中本土決戦も避けられないのではないかという状況で、事態打開のために背水の陣でのぞんだ体当たり攻撃だったといえるでしょう。

特攻について、単に戦時の教育によってマインドコントロールされた兵士が天皇のために自分の命を粗末にしたという見方を耳にします。確かにそれも一理あるし、忠臣蔵のようにうかつに美化してはいけないことですが、天皇への忠誠だけでなく家族や知人その他できるだけ多くの人の命を救いたいという純粋な正義感もあったのだらうと考えます。

特攻で亡くなった方の話を聞くことができないので真実はわかりませんが、今後の講義の中で自分の予想が当たっているかどうか可能なかぎり考察してみたいです。

まず最初に私が今まで特攻に関して持っていた知識とそれについて感じていたことなどを述べたいと思います。中学生の頃に私は山田莊八の小説「太平洋戦争」全9巻を読んだことがあり、講義を受ける前にいくつか聞いたことのある事柄もありました。大西瀧次郎や関幸男などの人物の名前もいくらか覚えていました。私が小説を読んだ時は、それらの人物達がどのような気持ちで自分の命を国へ天皇へ、または家族の為に捧げたかというようなことを自分だったらどうしたかなど重ねて想像したりなどした記憶があります。正直に言って今の私達の世代は日本が戦争をしていたのは昔話のように聞こえる時代に生きています。しかしもう一度当時の人々の、特に特攻という「必死」の行動を取った、そこまで追い詰められた日本人の思想を勉強することは今の世界にとってもとても意義深いと思いました。また、講義の中で初めて聞き改めて考えさせられたことがありました。それは「特攻の生みの親」と言われた大西瀧次郎本人が「特攻は統率の外道」と言ったということでした。彼は敗戦後自決ということでしたが、特攻という命令を下すのにそれに対して抱いた否定的な気持ちと肯定の気持ち、なんとも言えない気持ちだったことでしょう。今の私には想像することはできても理解することは不可能だということを実感しました。今回、議題が「特攻」と聞いた時に何か惹かれるものがありました。ただ単に「カッコいい」という気持ちが私の心のなかにあったからかもしれません。それは分かりませんが、その惹かれた気持ちのなかに当時の世間の人々と近い感情があるのかなと思いました。

私が講義を聴くまでに持っていた特攻に対するイメージは、ただ海軍全体が天皇のために命を捨てるのが常識でお国のためなら喜んで特攻をするという雰囲気だったというものでした。つまり初めから「必死」の状態だと思っていましたが、講義を聴き「必死」になる前は「決死」の状況があり、様々な要因があって「必死」と変化したのだと知りました。また、私は海軍の上層部・司令部の人間は初めから特攻を容易に命ずるような人の集まりだと思っていましたが、徐々に追い詰められやむなくそれを命ずることになったということを知り、日本の2

次大戦当時の軍人は異常で自分達とは全く異なる人々であると決め付けていた私の考えが、彼等も同じ人間であり特攻を命ずるに至る理由あったのだという風になりました。そして現代の我々にもこれと同じように状況さえ整えば普通なら異常と感ずる行為も、疑いなく出来てしまう人間になり得るのだという恐怖感を抱きました。これはある種のマインドコントロールかもしれませんがおかしい、嫌だと思っていても、ずっとそれをしなければいけない、それをすることを是とされる状況におかれていると、おかしい、嫌だという感覚が麻痺し、それをすることが正しいとなってしまうのだと思います。私の今正しいと思っていることにもそういうものがあるのかもしれませんが、今後も程度は違えどそういう圧力は日常茶飯事に起きていることではないかと思えます。つまり「特攻」は身近にあることなのだと思います。普段からそのような圧力に負けず、自分を強く持ち続けたいです。そして万が一にも間違いを起こさない人間でありたいと思います。

私が持っていた特攻に対するイメージと講義で知った特攻は今のところほぼ一致しています。「決死」ではなく「必死」だという点、戦略的に追い込まれた上での作戦だったという点、軍の中にそういった気風があったという点などが挙げられます。

また発見として、大西瀧治郎という人物について、特攻までに至る軍事的な流れについて、VTC管やスキップ・ボムなどによるアメリカ軍の攻撃について、またそのスキップ・ボムにおいては日本軍も特攻作戦の代わりとして、使おうとしていたことなどについては、今回の講義によって改めて得た知識でした。

私は、特攻については、講義の前半で触れた草柳大蔵氏と同様かどうかはわかりませんが、肯定的なイメージと否定的なイメージを持っています。肯定的なイメージというのは、郷土やそこにいる人のために特攻という行為に及んだのではないかという印象があるからです。否定的なイメージとしては、やはりそこまでやらねばならなかった当時の戦況の過酷さに対してです。

しかし、私は実際に戦争や特攻を体験した当事者ではないので、特攻をした人の精神、またその特攻という行為自体についてどこまでのことが、理解できるのかがいまいち自分でも不確かになります。

特攻の存在は知っていたものの、実際「特攻」について深く考えたことはありませんでした。あまりに尋常でない戦法のため、どこかで本の中や映像の中での出来事、そうフィクションの世界だと思っていた気がします。

先生がおっしゃった「特攻隊の本当の気持ちは死んでしまった人にしかわからない」という言葉が私の心に響きました。

戦時中の若者は私たちとは精神構造が違う。確かに何不自由のない現代社会で生きている私たちと比べれば精神的に強い面をもっていただしょう。しかしどんな人間だって死に対し恐怖を覚えないわけがないのです。必死を言い渡された彼らは果たして何を思い何を願ったのでしょうか。機内では本当に「天皇万歳！」と叫び最期の時を迎えたのでしょうか。

彼らの最期は誰も知ることはないのです。私は本やVTRでの彼らの姿を鵲呑みにしていました。実際知っている人がいるはずはない。当たり前のことなのに気付きもしませんでした。

もう1つ私が見落としてきた部分は、実践されるまでどういう経緯を辿ってきたかということです。

「もはや普通のやり方では米軍に勝てない」そこから生まれた体当たり攻撃。そこには合理性があったかもしれませんが人間性は全く存在していません。それを考えついた軍と、現場で隊員に伝える人間、そしてそれを決行する者の間に起こったやり取りは今まで私が知りえなかった事実でした。このままでは勝てない、しかし本当に尋常でない戦法を使わなければいけないのか。実際行動にうつしたとはいえ、そこには普通の人間の葛藤が存在していたことを知り日本人である私は少し救われました。

今まで、特攻隊は軍隊の非人道的な思想や「天皇のため、お国のためなら死ねる」といった教育の中から生まれたもので、初めから戦略の中にあったものだと思っていました。授業を聞いて、そのことよりむしろ、当時の日本軍が置かれていた状況が「特攻」というあってはならない戦法を生み出し、実行に移さざるを得ない状況を作ってしまったということを知りました。ただ、授業を通して、重要拠点であったサイパン島が攻略された時点で、降伏への選択ができなかったのかなという無念の気持ちを覚えました。サイパンが攻略された時点で、日本軍はほぼ壊滅的な状態に陥ってたはずだし、このままの状態で行ったら本土決戦も時間の問題だということは分かっていたはずなのだと思います。同じことが「捷一号作戦」の時にも言えたと思います。「捷一号作戦」の時に編成された航空隊の兵力ではとてもアメリカ軍にかなわないことも知っていたはずですが、打つ手のない状況で、降伏の選択しないで、体当たり攻撃をしてしまったのは、負けを認めようとしなかった日本軍の誤った大和魂なのかなと思いました。もしこの時点で、日本軍が降伏の道を選択することができたならば、その後の沖縄決戦や広島・長崎の原爆もなかったですし、それによる大量の国民の死もなかったと思います。そういった意味で、この特攻隊の出撃というのは、太平洋戦争において、日本が壊滅的な敗戦を迎えるその第一歩だったのではないかと思います。

今回の講義以前の特攻のイメージはどうであったのか、と考えてみたのですが、私にとってのそれは「決死隊」に近いものであったかと思います。しかし、講義の冒頭で触れた、「決死」と「必死」の大きな違いを知るにつけ、大きな間違いであったという恥ずかしさと、申し訳なさを感じました。普段の生活でも軽々しく「必死」という言葉は使うべきではないと思いました。そのような「必死」の部隊を通常兵器として採用するに至った大西瀧治郎氏の胸中を考えると、とても簡単な言葉では表すことの出来ないような1人間としての感情と、日本海軍のカリスマとしての決断に板ばさみにされた苦悩の様なモヤモヤが自分の中にもひろがる思いです。しかし、大西氏が「空母一隻二機命中・・・」の電文を聞いて、二発ではなく二機であることを強く語ったという話を聞くと、やはり1人間であったのだなぁと感じました。

今回の講義は何よりも日本人としての誇りを認識させてくれたと同時にやはり戦争の悲惨さ（陳腐な表現であるが）を考えさせられたと思います。最前線で国のために命を落としていった方々の精神の例え様のない強靱さは日本人だからこそのもの。それを美化するのは戦争を肯定する様でおかしい事なのかもしれないが、やはり特攻で亡くなった方々は、我々現代人がこうして平和に暮らしていく上で、頭の片隅に必ず残しておかねばならない存在であると思いました。また、それは義務であると。

私自身が抱いていた特攻のイメージと、講義で知った特攻とではさほどイメージ、認識の違いはなかったように思う。その一方で、新しい発見に出会えたことは、非常に新鮮であったと思う。

特攻とは、非合理的で非人間的であり、外道である。少々、左翼的な思想かもしれないが、現代の日本の歴史教育では特攻そのものを英雄視し、美談の如く語り継いでいるように思われる。これは、日本の軍国主義、ひいては戦争をも肯定してしまうような感じがしてならない。特攻とは、日本の軍国主義がもたらした悲劇、戦争の悲惨さ、全体主義批判のシンボルとして受け止めなければ、特攻そのものを真の意味でとらえにくくなるのではないかと思う。

今回の講義を受けて、新しい発見としては特攻を実行させた大西瀧治郎中將の存在とその理念である。海軍内部において、特攻へ否定的見解を持つ人間が存在したことは驚愕させられた。軍部など、人を人と思わぬ外道集団だと思っていた私にとって、軍部の中の唯一の人間らしさを見出すことができたように思う。そして、特攻をめぐる精神的背景などを追っていく中で、決死と必死との距離の大きさをなんとなく実感させられたように思う。

私の特攻に対するイメージは、特攻隊員を取り上げた映画からの影響が強いと思う。

特攻隊の隊員それぞれに突撃の瞬間までの時間があり、人生があったこと、洗脳されて国家のために突撃して行った人ばかりではなかった現実、特攻隊員を見守る女性達のことなどを私は映画を通して知ることが出来た。しかしこれは隊員ひとりひとりのことであり、今回の講義で知ったような、特攻が編成されていく過程や、計画・実行に関わった人間達のことについては深く考えていなかった。

特攻の準備が段階を経て決定していく中で、決定したものの誰が実行するのか、どのように隊員に説明していくのかということが問題となった、という話はあまりにも人間らしく具体的に生々しかった。

しかし、考えてみれば存在したものに始まりがあるのは当然のことで、人間を爆弾にしてしまったのもまた人間たちだったのだ。特攻の準備が進んでいく中で、出撃の直前まで特攻以外の方法で戦うことが考えられていた事実や、直前まで本当に実行するか否かの議論がなされていたという事実を知った時は大きな衝撃を受けた。また、指揮者にカリスマ性のあった大西瀧治郎が選ばれ、軍がその実行を彼の判断に委ねたことから、当時の司令部が特攻の実行を恐れていたことをうかがえると思った。またその大西自身もこの話が持ちあがった当時は拒絶をしていたという。目前のことしか見えていない緊迫した状況で何かが狂っていく、麻痺していく始まりの瞬間であったと思う。マスメディアの力によってこれが美化されればこの初めのジレンマはどんどん麻痺していったのではないかと思った。

私は、今回の講義を受けて、「特攻」について知らなかったことを学び、今まで持っていたイメージが更に大きいものになった。

まず「決死」と「必死」の違いについて学んだ。「神風特攻隊」は必死であり、助かる可能性は1%もないということは知っていたが、このような部隊は世界中でも類を見ないということを知り、改めて神風の悲惨さ・残酷さを感じた。決死隊ではなく必死隊であったというその事実を改めて学び、「必ず死ぬ」という特攻の実態を改めて考えさせられた。

また、最初の特攻隊を統率した大西中將は「特攻の生み親」なのかということに関して学んだが、私も「親かそうでないか」ということを議論すること自体がおかしいのではないかとと思う。「神なき神風」には、「親という表現はおかしい。子を殺す親がいるのか」と書かれていると聞き、私もその通りだと考えた。「親かそうでないか」ということよりも、大西中將が特攻を統率するようになったその背景の方がずっと大事なことだと思う。

最初の神風特攻隊が出撃するに到ったまでの歴史を学び、多くの事実を知った。特に、最初の神風特攻隊が出撃して、本部に「一発命中、二発命中・・・」ではなく「一機命中、二機命中・・・」

との報告で、「ついに一線を超えてしまった」と考えたという部分が印象に残った。その時の海軍本部や大西中将の心境を、もっと詳しく知りたいと思った。

私はこの夏、ゼミで「死生観」について調べたが、神風特攻隊の一人一人の死生観というものを自分で詳しく調べてみたい。今回の講義を受けて、特攻について今までよりも悲慘なイメージを持ったが、今まで以上に興味を持つようになった。

特攻という言葉を知ると、ただ単に無謀な愚行というイメージが強く、アメリカが911テロの際に引き合いにして日本を侮辱している感じもしたので、今まであまり関心はなかったのですが、講義を聴いて、そのような先入観や感情でかたづけられないと思いました。まず、神風特攻隊の性格が決死隊ではなく、必死隊であり、志願制ではなかったという事実を知って暗い気持ちになりました。決死隊ならば、死をかけて戦うにしても、生還の可能性は残されていますが、必死隊は文字通り、必ず死ぬことになるので、送られる兵士にしてみれば、何ともやりきれない思いだったと思います。特攻隊に関する本によると、神風を統率した大西中将は軍需省出身だったので、当時の日本の軍勢力がアメリカとの戦争を継続できないほど不足している事実を把握していたようです。それならば、潔く降伏するのが筋だと思うのですが、それは現代人の感覚で、当時の軍首脳部がその時点で降伏しなかった理由は、アメリカがかつてインデアンにしたように日本人を虐殺するからということらしいけれど、それは将兵らを引き締めるための詭弁で、帝国軍人としての面子にこだわり、完全な属国化を避けるための苦肉の策だったのかと思います。しかし、そのような姿勢が、逆に現在のアメリカによる日本の植民地化を継続させ、国際社会での立場を卑屈にさせている面もあると思います。また、今日の社会問題とも深く結びついているとおもいます。

私は今まで特攻隊に対して悪いイメージしか持てず、非人道的な愚かな行為であったとしか言いようがないと思っていた。特攻隊に関する話を読んだり特集番組を見ていても米艦隊に突っ込む前に無残に散っていく姿ばかりで、効果があったようには思えず無駄死にであったと思わせる。そもそも戦っている理由から理解できない。「お国のために」や「天皇陛下のために」といったナショナリズム的なものであるが、前者は自分が育った日本を守りたいという気持ちからだと思うのでまだ理解できるが、「天皇陛下のために」というのは到底理解し難い。なぜ家族や恋人のためでなく赤の他人のために命を落とすことができるのか。特攻隊はまさに教育勅語によって汚染された当時の全体主義日本国ナショナリズムの極限状態、集大成であったというイメージであった。

本講義を聞いて、特攻隊の全体的な悪いイメージを払拭することはなかった。しかし、大西瀧治郎中将が体当たり攻撃を進言された時に拒否をしていたということを知り、今まで完全な悪であったと思っていた上司たちも完全な悪ではなかった事を知り多少見直した。先にも述べたような特攻隊の話では、大抵若者ばかりが特攻させられているのを見た。私のイメージでも特攻＝若者というイメージが染み付いていて、なぜベテランみたいな人はいつも見送り役ばかりなのだろうと思っていた。その理由がまだ若者を訓練しなくてはいけないからと本日聞き驚いた。特攻隊編成などほぼ敗戦が確定していた時期なのに更に育てようとしていたとは、と思った。更にマスコミが美談として伝え、国民が感動していたというのは、今まで当時の人たちも悲しがっていたと思っていたのを覆すものであった。

これまで特攻についての話は何度か聞いたことがあったが、それについて私は、戦争で国の為天皇の為に命を差し出した名誉ある兵士であったと思っていた。しかし授業を聞いて、実際はもっと深いものが存在していることがわかった。

まず「決死と必死」について。それまであまりこれらについて考えたことがなかったが、この二つの言葉の間には大きな違いがあることがわかった。そして特攻隊の兵士は天皇に命を捧げたが、そのことは結果として日本は敗戦という形で終わったため、たとえ名誉ある死であったとしても、戦争の犠牲となり何となく哀れな人々であったと感じていた。しかしその反面自分が信じるもの（当時は天皇であったわけだが、それに限らず）そのために命を投げ出すという感情は、私個人としては嫌いではないし、分かるような気がするのである。かといって、大変これは矛盾しているが、もし自分の恋人や家族、大事な友達がそのような状況になったとしたら、私は絶対に反対だし嫌である。

とにかく特攻に就いてのイメージや考えは一言ではうまく言い表せないが、いろいろなことを考えさせられるものであった。そしてこのような人々がいたからこそ、現在の平和な日本があるのだと思う。このことは日本人として忘れていけないと思う。

特攻について最初に知ったとき、信じられないと思った。いくらそういう教育をされていたと知って、実際に自分の命を投げ出すなんて考えられないし、きっと上官にむりやり運転席に押し込められて、出発するしかなかった、というくらい押し付けであったに違いないと思っていた。特攻隊の兵士も本心では嫌がっていたのだろうと。

しかし去年、靖国神社にいったとき、正確なタイトルは忘れてしまったが、確か「英霊の

」とかいう、第二次世界大戦で死んでいった私と同じくらいの歳の少年や青年たちが親や婚約者、友達といった大事な人に向けて書いた手紙をたくさん展示した企画をたまたま見るようになった。そのなかには特攻兵士の手紙もあった。それを見ていて感じたのは、彼等は非常に純粋に国のため（それは母のため、家族のためという思いの延長上にあるのだが）に命を落とすことを自分の使命だと信じている。私は感受性の豊かな、純粋な精神を国のための一言で縛りつけてきた、政治家や軍人に怒りを覚えた。さらに講義の中で特攻隊はただ単に技術力が低迷したための捨て身の作戦だったということを知って、それはあきらかに日本の敗戦を示していたであろうに、戦争を続けたということは、戦争の異常性を証明するとともに、日本の愚かさを示すものでもあるように思った。

「戦争で死ぬ」ということがあった、あるいは今現在もあることを思うとき、まず始めに考えるのは「日本は平和で良かった」ということだろう。もちろん、戦争は無くなってはいないし、本当の平和というものが何なのかもわからない。

「特攻」に関するイメージは、「国のために死んでいった」という兵士達の美談と、「KAMIKAZE」による奇跡を期待した軍部首脳の無能さだろう。特に、「上からの命令で『犬死』を強いられた兵士達が、家族や恋人のことを思いながら国のために命を捧げた」というイメージが強かった。ところが、講義を聴いて、どうもそれだけではないらしいことに気がついた。それは、「特攻の『親』」とも言われた大西瀧治郎が「特攻は統率の外道」と言い、終戦の日に割腹自殺を遂げたことを聴いたからだった。さらには、当時のアメリカ軍の兵器に対して日本は為す術が無かったという軍事的な側面から「特攻」を再考してみると、「特攻」は追い詰められた日本軍部の苦肉の策であったことがわかってきたからだった。

それにしても、体当たり攻撃を採用するなら、どうしてもっと早く降伏しなかったのかと思わずにはいられない。しかし一方で、そんな風に思ってしまうのは戦争を知らない時代に生れた人間だからだ、とも感じてしまうのである。

私は高校生の時、日本史を選択していたがここまで特別攻撃隊のことを詳しく習ってはいない。高校では断片的な歴史を習う。それも大学受験用に合わせたものである。年号や用語などを頭に叩き込まれる。私も、そのようなことを行っていた一人ではある。しかし、わたしは、そんなものを学びたくて日本史を選択したのではない。歴史上の人物の生き方、考え方、さらには出来事一つ一つの因果関係を深く知りたいためである。過去の失敗を繰り返したくないという願望、過去と現在を照らし合わせて、より良い未来を描きたいという願望も歴史を学ぶこ

とによってかなえることが期待できると思う。今回の特攻の精神史というのは、歴史の年表などを眺めただけでは到底考えることができないものである。あの時、特攻隊として編成された人たちがどのような思いで戦地に赴いたのか。想像はできても当事者ではない限り気持ちを共有することはできない。「一発、二発が命中じゃない。一機、二機が命中なんだ。」というこの言葉に、私は特攻が決死から必死に変わったというのは事実と思われるが、何ゆえそこから思い止まって政策の変更ができなかったのか。司令官ならばその時にわかったはずである。人の命の重さ大切さに気づいていても、あの時はああするしかなかったというのであればアメリカの原爆投下と大差はない。有事法制などの議論が巻き起こり、軍国主義というものを体験していない人々が多い今こそこのような歴史事実の学習は必要だと思う。

私が知っていた特攻に関するイメージは誰でも召集された兵士が「天皇陛下万歳」と言って特攻隊として突撃していくのかと思っていたが実際は違っていた。特攻隊というといつても何であんなことをしなければならなかったのかと考えていた。講義を受けて何故そうしたのかということが理解できた。そこには米国ととともに戦っているのは勝つことができないという認識があった。普通の戦い方ではなく違った戦い方が求められていた。このままでは米国に近づけないどのようにしたら近づけるのか、それは人間魚雷、人間爆弾などの体当たりしかないということになった。体当たり隊の編成準備が命令された。米国に対する攻撃も水平爆弾、急降下爆弾などの攻撃をしたが問題があった。水平爆弾は重い爆弾が積めず、急降下爆弾は戦闘機が裏返ってしまい、しかも40度以上の角度でなければならなかった。それでスキップボンピングがとられた。作戦全体が特攻作戦である捷一号作戦が発動された。3日後最初の神風攻撃隊が出撃した。

今回の講義を聞くまで実は特攻のことについてほとんど知らなかった。特に印象に残ったのは、「決死」と「必死」という言葉の使い分けである。その二つの言葉を聞くまではそんなに違いはないものと思っていた。むしろ、「決死」の方が「必死」よりも言葉の重みがあるものと思っていた。しかし、講義を聞いてみると逆に「必死」の方がより重いものであることが分かった。そして、「神風特攻隊」が出撃して戦況が悪化していくについに「決死」から「必死」へと一線を超えるあの時の心情とは一体どのようなものだったのか。我々、戦争を体験していない者にとって当時の人から聞くことはできても、実際にそこでの状況を体験することはできない。書物を読んでもなかなか本当の真実というものに触れられていない。やはり歴史というものは一つ以上のものはないし、また歪曲されてはならない。我々が実際当時の人の状況にな

って考えることは本当に難しいことではあるが、少しでも当時の状況にたって物事を考えなければならぬことをこのような問題にぶつかった時に特に強く考えさせられる。起こったことに対してなぜ起こったのか、その原因とこれからは絶対に戦争を起こしてはならないという誓いを我々若い人に託しているのではないかと思った。

まだまだ分からないことばかりだが、これから講義を重ねていくことによって少しでも真実に迫っていきたいと思う。そして個人的に色々な文献から特攻隊について調べていきたいと思っている。

僕は「特攻隊」についてよく分かりませんので、論ずることはできません。ただ以前から思っていたことは、異常な戦法であったという印象です。なぜあのようなことをしなければならなかったのか。もちろんそれは、それだけアメリカ軍に敗退し、追いこめられていたからだということは知っていました。窮地に追い込まれ、やむをえず、特攻をせざるを得なかったのでしょう。

しかしたとえそうだととしても普通の戦法とはいえないと思います。人様の命を何だと思っているのでしょうか？兵士となる以上、帰ってこられない可能性があるとしても、そもそも死ぬことが大前提になっているというのは非常に悲しい話だと思います。上官もあんな方法をとらなかつたのではないのでしょうか。ただ、少しでも時間を稼ぎ、戦争を有利にしたいがために、苦肉の策として採用したのだと思います。以前からそのように感じていて、講義でも同様のことを聞くことができてうれしかったです。

特攻隊の兵士たちも、祖国を思っていたのかもしれませんが。でも実際には、拒否権もなく、拒否すれば抹殺され、自分だけでなく連帯責任として家族まで巻き込まれ、非国民のレッテルが貼られてしまう。兵士たちは家族や恋人・友人のことを思い、特攻にならざるを得ず、海に散っていったと思います。

今の日本には徴兵制もなく、自分には戦闘のことがよくわかりません。ただもし出生することになったら、絶対行きたくありません。確かに、平和であることはいいことです。でも、負の面として、戦争のことが他人事のように感じられ、実感がありません。物語のように感じられてなりません。

特攻とは、当時のＡＢＣＤ包囲陣による燃料の不足から、行きの分だけの燃料で済む苦策の末の突撃隊として結成された。そして、元寇の際の「神風」という古き狂信的観念を持ち出し、この残酷な行為が正当化された皇国思想の支配があったと認識している。ここに原因を求める

時に天皇の責任が問われることとなるが、天皇が直接戦争に関与していないことから、特攻隊を考案・実行した軍部の責任がまず問われるべきだろう。講義では、ミッドウェー海戦、ガダルカナルの戦いにおいて優秀な熟練パイロットを失い、学徒出陣による体当たりの発想に至ったこと、素人犠牲の作戦がその場しのぎ的に採られたという状況、又、近代戦争において皆無である「必死」の決死隊であるという事実に、日本の特殊性を発見させられた。陸・海軍双方において命を顧みない風習は、日本の「武士道」や「殉死」の思想があり、それが皇国主義的精神主義と結びついたことに関係があると思われる。西洋キリスト教世界での自殺の禁止との道徳観の相違が日本の特殊性となり、その悪例が「特攻の思想」ではないだろうか。自己犠牲の利他主義は自主的なものであれば美德となるが、国家からの強制的犠牲の非合理性・反道徳性を認識し、抵抗しえない全体主義の時勢と切り離してこの悪徳を考えることはできないかもしれない。

9・11の自爆テロの行為自体は非難されるべきであるが、反アメリカ思想の背景、即ちイスラム世界の貧困・混乱の状況を、特殊性に求めるのみでなく、直視しなければならないはずである。

私は、今回の授業で初めて大西瀧治郎という人を知った。そしてこの人が、特攻の生みの親ということも知らなかった。今までのイメージでは、特攻は、軍の幹部によりすぐに実行が決まり、好意的に行われているのかと思っていた。しかし、授業で特攻の電文に至るまでを学び、特攻の歴史について新たに知ることができた。1943年3月28日に体当たり攻撃を遂行したときも、大西瀧治郎はそんなむごい事はできないと拒絶していたということは、今までのイメージからは想像もできない。特攻は絶対にやってはいけないことだと思う。それは普通の人なら誰でも思うことだ。大西瀧治郎も思っているはずだ。それでも特攻を実行しなければならなかったのは、戦争という時代背景があったからに他ならないだろう。その時代背景について、今回の授業でより関心を持ったので、今後注目し、もっと詳しく調べてみたいと思う。

私が今まで知っていた神風特別攻撃隊（「特攻」）は、学校の日本史の授業やそれに関する本やビデオで学んだように、戦局が極めて悪化したなかで、もう他に手段がないということで、国体護持のため、祖国を防衛するために、ああいうような非人間的な自爆攻撃を行ったということであった。そして、テレビのドキュメンタリーにおいて、両親に対する感謝の気持ちをつづった特攻隊員の手紙やアメリカ軍側からのカラー映像に映る航空機が突っ込むシーン（そのなかには実際に攻撃を受けることになる艦船からの映像もあった。）などにおいて、特攻に対

するイメージを描くことができた。

そして今回この講義で特攻について学ぶなかで、特攻というものは現実の軍事的な事情から冷徹にその計画が練られたものであることがわかった（実際にいざそれが行われようとしている段階になって躊躇する事態になるのは事実ではあるが。）

また特攻を行うまでの作戦の段階で、様々な米軍に対する接近戦の細かな内容が検討されていることがわかり、こういう前代未聞の非人間的な攻撃が行われる前に、よくこのような官僚主義的な実際的な思考を行うことができるものかと、異常に感じ、これが戦争の一つの究極的なきつところまできた形態なのではないかと感じた。そして非常に印象的であったのは、最初の特攻のときからマスメディアの取材のなか、つまり衆人環視のなかで特攻が行われたことであり、これは異常な環境でもあり、衝撃的な事実でもあった。

このような攻撃が行われたのは、諸外国でも例がなく、いさぎよく死ぬことをよしとする武士道や明治時代から始まった天皇中心の日本主義や軍国主義を教育のなかで教えるようになった日本独特の社会的あるいは精神性が関係してくるのではないだろうか。

私がこれまでもっていた特攻についての印象はこうである。

「戦局の悪化につれて、なす術のなくなった日本軍はただやみくもに青年兵たちへ体当たり攻撃を命じた。」

この感想は日本で行われている歴史教育、平和教育にかんがみればごく当然のものであると私は考えている。

しかし私は今回の講義を受けて、これは単に感情に訴えるだけの情報であると感じた。そして特攻は後の悲劇を招いたにせよ、合理的判断から編み出された方法と考えさせられた。

人的資源、物的資源の両面で相対的に劣っている日本軍はもはや尋常な方法で攻撃を行うのが困難だったのである。そこで異常なほどの大きな敵に異常な方法で立ち向かうということは一見すると無謀ではあるが、戦争を遂行するためにはもっとも有効な選択であったのだろう。

現在われわれはその結末を知っているからこそ批判的に特攻を語っている。感情に訴えるのであれば特攻は憎むべきものであろう。しかし私は日本軍の型破りかつ果敢な発想に少なからず敬意を持った。当時、効果的戦法として編み出された以上、憎むべきものは特攻ではなく戦争そのもののなのである。

今まで受けてきた教育の中で、私は特攻に対して悪のイメージと可哀相なイメージが非常に強く残っている。またお国のためなら命を平気で捨てられるという、自分にはまったく理解で

きない思想をもった人々の異常な時代の話として特攻を捉えてきた。しかし、私のイメージは現実起こった特攻の話と少し乖離していると今日の授業を聞いていて感じた。1つ具体的にあげてみると、まず私は特攻兵はみなお国のためなら死をも恐れず、敵に向かって突っ込んでいけるし、司令部も特攻を非常に名誉ある大任を任されたと思うように、部下を激励したと思っていたが、これは大いなる勘違いだった。もちろんパイロットの中には命を顧みない気風があったことも事実のようだ。しかし授業でも学んだが、やはり「特攻」は決死ではなく必死なわけで、飛び立ったら最後帰ってこれないわけで、それをわかっていて出撃命令をくだせる人いれば、くたさずに部下の命を救った人もいた。つまり人間らしい感情を持った人間が日本軍の中にもいたということである。これは私自身大きな発見だった。次に私が今回の授業で非常に驚かされた話について述べたいと思う。それは敷島隊の特攻をマス・メディアが監視していたという事実である。これには開いた口がふさがらなかった。一体何のために、またどういった気持ちでこれから死を迎える人に取材を行ったのか。また受ける側はどのような気持ちで、彼らの取材をうけていたのだろうか。私には双方の心情ともまったく検討もつかないが、おそらくこのようなマス・メディアの取材の目的は、国民に天皇や国のために命を捨てた者達を報道することで、今一度大日本帝国という国家の掲げるイデオロギーに国民を同調させ、国家としての結束力を高めることであったと考える。いわば、特攻隊はそのための犠牲である。この見解があっているかはわからないが、興味があるので是非その辺を知りたい。

特攻の問題は、とかく感情的に語られることが多い。一方、本講義ではその軍事的意義や軍事史上の位置づけがあつかわれた。その視点の新鮮さに、興味をもって講義を聴いた。

だが、私は軍事に関する事柄にたいして無条件に嫌悪感をもってしまう。そして、軍というものに関してあまりよく知らない。これは私だけでなく、戦後の世代一般について言えることであろう。このことは、かつての戦争、そして今起こっている戦争についての人々の理解を妨げてはいないだろうか。たしかに、人々が軍隊について知らないということは平和のしるしなのかもしれない。しかし、「平和」な現代の日本にも米軍が駐留し、北朝鮮の脅威が降りかかっている。私たちは、けっして軍というものと無縁ではないはずである。そもそも特攻も、在日米軍も、北朝鮮も、感情だけによって対処すべき問題ではない。軍や戦争というものの歴史的・社会的・文化的な背景を考える必要がある。私はそのような姿勢を本講義から感じ取った。

特攻自体はテレビなどで見て航空機で敵の艦船に突っ込む攻撃法だということは以前から理解していた。また人間魚雷や人間爆弾のことなども話には聞いたことがあった。しかし、な

ぜ特攻攻撃をしなければならなかったのか、特攻に至る経緯というのは今まで考えてみたことがなかった。「天皇陛下バンザイ」と言って崖から身投げをする兵隊の映像をテレビで見たことがあるが、そうしたある種の精神性のものとして特攻が行なわれていたのではないかと思っていた。

深刻なパイロット不足などがあったとは考えたことがなかった。もちろんそうした状況であれば降伏して戦争を終わらせるのが一番はよいのであろうが、それでも戦争を継続するとなると特攻という方法以外には手立てがなかったのかもしれないということは理解できる。

自身の死をもって敵を倒して、いったいそれは誰のための戦いなのだろうか、たとえそれで戦争に勝っても死んでしまっただけでは戦争によって得た利益さえ享受することができない。その後の平和も死んでしまっただけでは関係ない。死ぬことを前提とした戦いの無意味さについて考えさせられた。

「特攻隊」の存在について、祖母から聞いたことがあります。その時は、ごく少数での戦闘方法であると思っていましたが講義で特攻隊にいた人々の話で、未出撃者同志、周りに知り合いがいなくて、ほとんどの人が死んでいるという話を聞き、多くの特攻が当時の日本では行われていたのだと驚きました。そして、まだ自分が戦争に対してあまりにも無知であったと気づきました。また、特攻については、単になんて恐ろしいことをしていたんだろうと思っていただけですが、当時の日本は現代の日本では考えられないほど、国民自体も国を大切に考え、自らの命を武器にしようとしたのだと知りました。決死から必死への距離は長いはずが、特攻の存在の登場により必死が当然となり、国の勝利のための団結がここまで強い形になるのだとも知りました。現代は何事にも体当たり攻撃をできるほど、国民は強くないし、団結という言葉に興味を持っていないでしょう。団結の結果、「神風」という特攻の形で現われるのではなく、違う形で現われて欲しかったと思いました。当時の日本の思想は武器を間違え、勝利の意味をはき違えて、特攻が生じたのだと思います。

特攻のイメージに関しては、今のところ特に変化はない。

なぜなら前回の講義では軍事的歴史のみを取り上げており、それ自体に関しては触れていなかったからだ。

そこで、特攻の軍事史的な視点から発見したこととそれに関する意見を書くことにした。

まず、特攻作戦の実施は、私が思っていたよりも長期に渡って企画されていたことを知った。最初の計画が実行の一年半も前から考えられていたというのは知らなかった。

このように実はこの作戦がぎりぎりの選択であった事を知り、首脳部に対する人間性の不信が少々和らいだ。

それにしても、やはりこういった作戦を採り続けた海軍の中心幹部達の責任は大きいと思った。最後まで考え抜いた末に実行したとしても、その後の使い方が先生がおっしゃったように通常兵器同様になってしまい、実効性がない(戦況がよくなるしない)のに、無為に犠牲者を生み出し続け、作戦変更をしなかったということは、意思決定者の責任が問われなければならないと感じた。

すると問題が大きくなって天皇の戦争責任という話になってしまうのかもしれないけれども、実際の場合で作戦を決めていく人が、歯止めをかけられなかったことは明らかに問題だと思った。

つまり、考えた拳句これしかないと思って選択した手段=特攻を始めたことに対しては、私は特に問題としないが、その作戦を通常兵器と同じように使用し、「必至」の作戦で人命を失わせたことは大いに問題があると思った。

思想とは離れてしまったけれども、今回の講義で考えたのは以上です。

次回以降、なぜ特攻隊員たちが、この作戦に殉じたのか知りたい。マスコミによる美化以外に何が作用したのだろうか。